

嵐の中の船出 “他人事、ではなくなってきた…世界的なコロナ感染拡大、未知のウイルスに対応「前倒し開院」

2023/03/1

【コロナ禍で開院 国際医療福祉大学成田病院 “奮闘記、（1）”】

世界がいわゆる「コロナ禍」に襲われて丸3年が過ぎた。まだ日々多くの人々が感染し、命を落としているが、それでも社会はこのウイルスとの距離の取り方に慣れ、徐々に従来の日常生活を取り戻しつつある。

しかし、3年前の今頃はどうかだろう。横浜港に入港した豪華客船「ダイヤモンドプリンセス号」を映し出すテレビ画面に釘付けになり、不足するマスクの入手に奔走し、「不要不急の外出制限」という、戦時下のような恐ろしいワードに怯えていたはずだ。

そんな2020年3月、大学病院がオープンした。本来は1カ月後の4月の開院に向けて準備を進めていたこの病院は降って湧いた未知のウイルスに対応するため、国の要請を受け、前倒しでの開院を決意する。

長年診療を続けてきた医療機関でさえ混乱の極みに立たされたこの状況で、新規オープンを迫られた同院の混乱は想像を超えるものがある。5回にわたり、その大学病院がコロナと闘ってきた軌跡を振り返る。

千葉県成田市畑ケ田。成田国際空港から直線で3キロほどの田園地帯に、国際医療福祉大学成田病院が「前倒し開院」したのは20年3月16日のことだった。

日本では1979年の琉球大学以来、新規の医科大学・医学部の開設が許可されていなかった。じつに38年ぶりとなる新規医学部として、国際医療福祉大学に新たな医学部が誕生し、同大は成田のこの地に附属病院を開設することになった。

「成田空港の目と鼻の先という立地もあり、海外からのインバウンド需要に応じた国際的な医療提供と、地域医療への貢献という2つのミッションを掲げて、開設準備に迫られていました」と語るのは、同院の宮崎勝病院長。4月に予定されていたグランドオープンでのテープカットなどの式典も視野に入る段階で初めて、新型コロナウイルスの情報に接する。

「20年1月20日頃に日本での第1号感染者が出たと記憶しています。ただこの時点ではウイルスの実態がつかめておらず、病院としてどう対応すべきか—という見当すらつかない状況でした」

様相が一変するのは2月だ。先に挙げた豪華客船で集団感染が起きた。並行してWHO（世界保健機関）がパンデミック宣言を発出したことで、オープン前の同院にとっても“他人事、ではなくなってきたのだ。

「世界規模の危機であることが鮮明になってきたところで、国から感染者受け入れの要請が来たのです」

1カ月後の開院を控えて箱物は完成していたこともあっての要請だ。これに対して同院を運営する法人は、「高度な医療機能を持つ大学病院として、しっかり感染者を受け入れるべき」との判断から開院を決断。国はそんな同院の姿勢に共感し、特例で前倒し開院を認可した。全国でもいち早く、自前でPCR検査体制を整備していたことも強みではあった。とはいえ、什器や備品などは揃っていない。不安要素が圧倒的に大きい中での船出—それはまさに、暗中模索での旅立ちだった。（取材・長田昭二）